
アリジゴク

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリジゴク

【Nコード】

N1571C

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

空を眺めため息をつくアリジゴク。そして、空を飛ぶハチ。ハチは、ため息をつくアリジゴクをたしなめる。その理由とは？

さんさんと輝く空。涼しい風。生き物が踊る季節。

一匹のアリジゴクが、そんな五月の空を眺めていました。
羨ましげに。

僕も、あの空を飛んでみたいな。

アリジゴクは、自分のつくった、まるですり鉢のような落とし穴の中心で、空を眺めてため息を吐きました。

僕は、空を飛べないアリジゴク。だから、この季節を楽しめない。
でも……。

僕は変われるんだ。カゲロウに。空を飛ぶ、カゲロウに。

さらっ。

獲物がかかった音。

アリジゴクは音のした方向に目を向けました。

見ると、そこには、アリジゴクの巣に落ち、あかくアリの姿がありました。

アリジゴクは、アリの足を掴んで引き寄せると、大きなアゴでアリをむしゃむしゃ食べました。

そして、硬くて食べられなかったアリの足を、ポイツと投げ捨てました。

あゝあ、早く、大人になりたいな。

アリたちを食べて、僕は大人になる。空を飛ぶ、カゲロウに。

アリジゴクは、空を眺めてため息を吐きました。

「ため息なんて」どこから声がありました。「つくものじゃない」

アリジゴクが辺りを見渡すと、アリジゴクの巣の縁^{へり}に、一匹のハチが立っていました。

ハチは、言いました。

「君は、ため息をついちゃいけない。なぜなら」

なぜなら？アリジゴクが聞くと、ハチは答えました。

「君は、まだ子供だからだ」

なんで？そう聞くと、ハチはまた答えました。

「空を飛べば、いやでもため息をつくことになるからね」

ハチは嗤いました。

何で嗤うのさ、とアリジゴクが怒鳴ると、ハチは何も言わず、飛んでいってしまいました。

ふん、空を飛べるやつには、僕の気持ちなんて分かるはずがないんだ。アリジゴクはそう思いました。

僕は、早く空の飛べる、大人になりたいんだ。あの空に、舞いたいんだ。

やがて、六月がやってきました。

雨がぱらぱらと舞って乾いた土を潤し、植物たちは喜びに溢れています。

でも、アリジゴクは不満でした。

空を、見たいなあ。それに。

アリジゴクは腹を鳴らしました。

おなか減った。

このごろ、雨のせいで、獲物のアリたちが巣にかからないのです。

これじゃあ大人になる前に死んじゃう。

アリジゴクは、またため息をつきました。

「ため息なんてつくものじゃないよ」どこかで聞いた声。

声のした方を向くと、そこにはいつぞやのハチが立っていました。

ハチは、以前のように巢の縁に立っていましたが、不意に巢の中に落ちました。

「・・・・・・・・ため息なんて、子供がつくんじゃない」

ハチは雨で濡れ、息も絶え絶えに言いました。

久し振りの獲物に、アリジゴクはゴクン、と喉を鳴らしました。

「・・・・・・・・食べるのか、僕を。」

おなか、減ってるからね。アリジゴクは答えました。

ハハ、とハチは嗤いました。そして、言いました。

「食べないほうがいい」

命乞い？アリジゴクがそう訊くと、ハチはアリジゴクの問いには答えず、言いました。

「君は、あと一回食事をする、大人になる。大人の、僕にはわかる。」

でもね、君はまだ、大人になっちゃいけない」

何で！僕は、大人になりたいんだ！アリジゴクがそう言つと、ハチは嗤いました。

「君は、この巢の中からしか、空を見てないからだ。空は決して、きれいなだけじゃないんだから。」

うるさい！僕は僕は・・・・・・・・。

大人になるんだ。

そう叫んで、アリジゴクはハチをバリバリと食べました。

そして、アリジゴクは大人に、カゲロウになりました。

空は、思ったよりきれいではありませんでした。
空のそこかしこに、死の香りが漂っていました。

アリジゴク
子供のころ眺めた空は、あんなにきれいだったのに。なんで？

地面には、動物や虫たちの屍骸が落ち葉のように重なっていました。
した。

カゲロウがまだ子供だったころ見た空には無かったもの。それ
らが、カゲロウの心を締め付けました。

もう、こんなもの、見たくない。

そう、カゲロウは叫びましたが、もう、遅すぎました。

カゲロウは、カゲロウとして生きていかなばなりません。

カゲロウは、死ぬまで、六月の空を舞うのでした。

そして、アリジゴク子供のころ見た空の色をただただ思い出して、ため

息をつくのですた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1571c/>

アリジゴク

2010年10月9日02時07分発行